

# 『球と台とヤスリ』

室市雅則

5,420 文字

あらすじ

私は朽ち果てそうな物置で薄汚れた球を見つけた。  
それを見ていると不思議なことに磨かずにはいられなくなってしまう。  
磨くと綺麗になるのだけど、球は数日後にはまた薄汚れている。  
再び磨く。また汚れる。また磨くを繰り返す。

薄汚れた球を手に入れた。

先ほど庭にある今にも朽ち果てそうな物置を初めて開け、中を覗いた時にそれが目に飛び込んで来た。

おそらく前の住人が残していったものだろう。

私自身はつい数日前、この平屋に越して来た。

仕事柄、パソコンとネット環境さえあれば場所は問わないし、あまり稼ぎも良くないので、家賃も安価な上に環境も良いこの街に越して来た。

数年前に日本一人口流出度が高い土地、平たく言ってしまえば住む魅力がない(私にとってはそれが魅力だったのだが)という不名誉な称号を得てしまったようだが、海が眺められるし、暮らすには不便がない。確かに、家は眺望の良さと引き換えに車では登って来られない狭くて急な坂の上に建てられているから、外出を頻繁にする身であれば、きっと不便だろう。だが、私はだいたい家にいるし、買い物だって週に何度か独り身の量を購入するだけだから、特に不都合を感じていない。

そんな場所だから、買い手も借り手もない家が多く、私もかなり格安な家賃で借りることができた。実際に私の家の周りも数軒先の枇杷の木が生い茂った家に若い夫婦が住んでいるだけで、空き家ばかりである。その若い夫婦とも引越しをして来た日に彼らが友人と思しき方々と庭先でバーベキューをしていたところに遭遇し、挨拶をしたきりで、煩雑な近所付き合いに煩わされることもない。

不動産屋から、前の住人は老夫婦(過疎化と高齢化が顕著に見られる)で長年住んでいたが、数年前、急に思い立ったように都心に近い高層マンションに越したと聞いていた。、彼らの住み方が良かったのか、不動産屋の手入れが良かったのか、家自体は綺麗で、人が住まぬ家の籠ったような独特な匂いすらなかった。

それに反して、物干し台が置いてある庭の物置はボロいのである。

私の腰くらいまでの高さがあるそれは、家より半世紀前に設置されたのではないかと思うくらいインパクトのある風貌なのだが、不動産屋と下見に来た時には気付かなかった。引越して初めて気付き驚いたが、諸々の作業のうちに存在を忘れていた。

この家での暮らしに慣れ始め、家に私の生活の色(越して来た当初に立てた『整理整頓』の誓いは早々に反古した)が浮かび始めた頃、物置を思い出した。仕事をしなくてはと思いながらも思っただけで、昼食の素麺で満腹になったから、寝転がろうとした時である。

思い立ったが吉日のごとく、早速、サンダルをつっかけ庭に出た。

数十歩で物置へと辿り着いた。

近くで見ると歴史的建造物かのような異彩を放っている。

引き戸に手をかけると痛みが走った。

木のささくれが人差し指の先に刺さっている。

頭に来たので蹴飛ばそうと片足を上げると軸足のサンダルが滑り、盛大にずっこけた。

誰も見ているわけではないのに、恥ずかしくなって平然を装って立ち上がる。

そして、ささくれを抜き、今度は慎重に引き戸に手をかけて物置を開けた。

薄汚れた球が目飛び込んできた。

何故なら、内部は球以外に目立つ物が入っていなかったのだ。他には球が置かれているお猪口を逆さにしたような台と鉄の棒ヤスリだけが置かれていた。

その球が見るからに手が汚れてしまうような見た目であったり、やにまみれで黄ばんでいるようであれば、私は触れようとは思わなかった。

しかし、この球の薄汚れ具合というのが何とも絶妙であった。

スイカが並んでいれば、買う気もないのに叩いてしまう反射のような、つつい触れたくなるような薄汚れ具合なのだ。

そしてタチの悪いことに横にはこれで磨けと言わんばかりの棒ヤスリなのである。

触れたい、磨きたいという欲求がじんわりと私を支配し、球とヤスリを手にし、縁側に腰掛けた。

案の定、触れても私の手が汚れることはなかった。

ソフトボールくらいの大きさで、材質は木のようで軽い。

早速、私は球を磨き始めた。

しばらくすると地肌が露出し、木目が現れた。一方で、不思議なことに汚れは落ちてでもそのクズが落下することはなかった。

順調に磨きは進んだが、球を隅々まで綺麗にすることには骨が折れた。気付けば、ひぐらしが鳴いていた。

磨き終わるとそれは優しい色をした球に生まれ変わった。

あれこれ角度を変えたりして、眺めていると床の間に飾ったらしっくり来るような気がしたので、台を持ってきて置いた。台は球と同じ材質のようだったが、こちらは汚れていなかった。

予感ハ的中、この家のここにはこれがないように感じた。

冷静になって球を見ると汚れが落ちた分だけ、ほんの僅かだけ小さくなった気がした。

私は心が満ち足りてしまい、これで一日の仕事を終えた気がしたので、風呂に入り、缶ビールを片手に食事を済ませて寝た。

それから一週間。

日々を漫然と原稿の構想だけで終えて暮らし、球が床の間にあることに違和感を覚えなくなっていた頃、再び寝転がろうとして気が付いた。

球が見つけた時と同じように薄汚れているのである。

湿度が多い時期でもないのにカビでも生えたのかと思ったが、やはりその薄汚れ具合には妙味があった。

すぐに磨きたくなるのであった。

私には売るほど時間がある。

だから、すぐに棒ヤスリで磨きにかかった。

コツを掴んだせいか、前回よりも短い時間で磨き上げることができた。

汚れが落ちた分、確実に小さくなっているのは間違いがなかった。

床の間の台に戻し、すっきりするかと思いきや、モヤモヤしたものが残る。調和が取れていないアンバランスな感覚。

その原因を考えると私の部屋が問題だと分かった。

積み上げられた本や資料、敷きっぱなしの布団の存在であった。

この心の曇りを解消すべく、気合を入れて部屋の片付けを始めた。

住み始めて一ヶ月ほどであるにも関わらず、確実に汚れていた。私の場合は特に何もしていないから、本当の意味で生きているだけで汚れるものである。

良いとか悪いとかではなく、それが生きている証拠だと思う。そして、自分の汚れというのは存外に自分自身では認識しない。私も一人の身であるから、本来は気にするはずはなかったが、この球によって気付かされた。

汚れてるぞって。

片付けを終えて部屋を見渡す。

気持ちが良かった。

自分が散らかし、自分で清掃した完全型自己完結にも関わらず達成感を得た。

今回も満足感に浸り、風呂に入ってビールを飲んでしまった。いつもは、飲み終えた缶は卓に置きっ放しにするのだが、掃除をしたばかりなのだからときちんと始末をした。

それから私の部屋は清潔、整理整頓が保たれた。

しかし、また一週間くらいが経った頃、あの球がいい感じで薄汚れていた。

埃を被るような環境でないのに不思議で仕方がない。

汚れ具合の風情は相変わらずですぐに磨きかけた。

さらに少しだけ小さくなった球を相変わらず汚れない台へと飾り、部屋を眺める。

だが釈然としない。

また心に問いかけ、考えていると理由に思い当たった。

襖の向こうの部屋だ。

古い家の襖だからどうしても隙間が空いている。その隙間から覗く雑多な部屋が調和を乱していることに気づいた。

早速、隣の部屋を片付けた。こちらはたまに着るスーツや使わなくなった腹筋マシンが適当に置かれているだけなので、それらをビシッと整頓した。

襖を開けて家中を見渡す。

気持ちが良かった。

今回は、ギリギリの生活を支えている連載原稿の締め切りが間近であったので、風呂とビールにはせずに簡単な夕食を済ませて、仕事に取り組むことにした。

それから五日ほど経った。

球は汚れていない。家の中も綺麗だ。

この前、担当編集者が先日の原稿の感想を直接伝えたいと家にやってきた。

ここまで2時間ほどかかったらしく「まるで小旅行ですね」と苦笑していた。

彼は床の間の球を見て、「何かの記念品ですか？」と尋ねてきたので、この球の不思議を話そうと思ったが、勿体無いというか、自分だけの秘密にしようという気持ちが勝り、「そんなもんです」とだけ答えて会話を打ち切った。

肝心の感想を訊くと「いまいち」ということであった。そして、あと数回で連載を終えてもらうかもしれないと伝えられた。

だから、彼はここまで2時間かけてやってきたのだ。

メールや電話で済まそうとしない誠実さに報いるため、自分の口を糊するためにも創作に燃えなくてはならないだろう。しかし、私は気もそぞろである。それは球がいつ、なぜ、薄汚れるのかが引っかかっているからである。

私の生活の危機感よりもそちらが気になってしまう。

そこで私は決定的瞬間を目撃すべく、寝ずの番で球を監視することにした。

食事の時も、トイレの時もずっと球と過ごして、その謎の解明に挑むのだ。

球と私の根比べが始まった。

あっという間に二日が経った。

私だけが疲弊し、球はただじっとしているだけであった。

おみくじを引いたら間違いなく『待ち人来ず』と書かれていたと思う。

何としてもその瞬間を見逃したくない一心であったが、相手は静物で私は生物。朝方、睡眠欲には抗えず、ほんの一瞬だけ目を閉じてしまった。慌てて目を開け、球を確認すると、球はしっかりと美しく薄汚れていた。

不覚であった。

だがこれで分かった。球はこちらの小癢な意図などは見透かしており、汚れる瞬間を見るなど不可能であろう。監視カメラをつける方法もあるだろうが、それはどうもフェアじゃない気がするから、もう私は『そういうものだ』と観念した。

球が薄汚れているから、私は眠い目をこすりながらも磨きをかけた。

もはやその研磨技術は匠の領域に達しており、あっという間に美しくなった。そして、さらに小さくなった球を床の間に戻した。

これで文句はないはずなのに、釈然としない。

眠気よりもそちらの気持ち悪さが勝り、原因を考える。

家でも庭でもないように思う。

何だろう。

「あ、枇杷の木」

思わず口に出してしまった。

若い夫婦の家の庭先から公道へとはみ出ている鬱蒼とした枇杷の枝葉が気になるのだ。

買い物に行く時も少し体をずらさなくてはいけないくらい伸び切っている。

しかし、勝手に伐ってはまずいだろう。

再び私は悩んだが、誤魔化すしか方法はないだろうと思った。

とはいえ、どんな巧妙な誤魔化した方でも明け方に行くのはオカシイ。

それに私は嘘を書くことを仕事にしているが、嘘をつくのは下手だ。

どうしようかと考えあぐねながらも十時前くらいに若夫婦の家を訪ねた。

「枇杷の葉茶を作りたいから伐採させてもらえないだろうか」とやっと閃いたのはこんな言い訳であった。かなり苦しいが、健康的な感じだし『立派に枇杷が茂っていますね(邪魔ですよ)』の『ぶぶ漬けでもどうどす?』的な要素もない。

見事に若夫婦は何の疑問を抱かず、むしろ「逆にさーせん」と詫びながら茶に合うような菓子までくれた。人は見かけによらないものだ。

私は伐採した枇杷の枝葉をゴミ袋に入れて持ち帰ってようやく充足感を得られた。

しかも今回は今まで以上に汗をかいたせいか、ビールも美味しかった。

こうして相変わらず球は薄汚れ続けた。

それを追って磨くと湧き出てくる『何か違う感じ』も拭う作業はエスカレートした。

町内の掃除、小学生の登下校を見守るおじさん、福祉ボランティアなどを行い、ついに『街を変えたい』とまで行き着き市長に立候補した。

地元出身でもなく、市議員の経験もないが、『この街を磨きたい』をスローガンにした選挙活動中には頻繁に「ここまで真摯な人は初めて見た」と好評だった。それはそうだろう。何故なら、本当に誰もよりも私自身が生きる上でこの街の快適を求めているのだから。

そして、見事に当選を果たした。

嬉しかった。

応援者との万歳も終え、相変わらず住み続けた家に一人で帰った。

ここまでの原点である球を見ると選挙活動開始直前に磨いたばかり(その時は、忙しい朝の駅で「おはようございます」と声をあげることが居心地の悪さの原因であったのでそ

れを中止した。応援者には呆れられた)にも関わらず、薄汚れている。

薄汚れ具合は依然として絶妙であったが、ビー玉くらいにすっかり小さくなってしまっている。

私は私の機動力となった玉への感謝の念を込めて磨いた。

すると球が粉々に砕け散った。

そして、折り畳まれた小さな紙が出てきた。

それを広げると文字が書かれていた。

『上を向け』

反射的に上を見たが木目調の天井しかない。

上を向きながら部屋の中を歩き回ると床の間の天井に切れ目があるのが分かった。

椅子を持ってきて、天井板を押し開ける。そして、黒澤明の『椿三十郎』で若侍たちが床下から顔を出したように顔を出して屋根裏を見る。

真っ暗で何も見えない。

携帯電話を取り出してライトを点けた。

そこには薄汚れた球がびっしりと並んでいた。

どれも味わい深い汚れ具合であったが、何故か磨きたいという欲求が生まれなかった。

もう私には必要がないように思えた。

私は手前の一つを取り、床の間の台と棒ヤスリを携えて例の物置小屋に向かった。

ささくれに注意しながら引き戸を開ける。

月明かりがガランとした内部に差し込む。

振り返るとこの一年くらいは充実していた。

まさか市長になるなんて夢にも思っていなかった。

これも何かの縁だろう。

市長の職責を果たしたら、この球と台とヤスリの話短編小説にでもしてやろう。

そう思いながら三つを私が見つけた時と全く同じ所に配置をし、引き戸を閉めた。

引越しをすることに決めた。

きっとまたどこかの誰かが薄汚れた球を見つけ、磨き、新たな道を見つけるのだろう。

私もまた新たな人生を磨き始める。

(了)